夜桜奏は落としたい～天才音楽家たちの恋愛重奏戦～

にゃんぱらりん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立秀知院学園！

天才たちが集まるこの学校の中でもさらに優秀な者たちが集まる生徒会

そこでは恋愛頭脳戦（笑）を行う生徒会長と副会長がいた…

時を同じくして天然な書記を落とさんとする庶務の姿があった

多くのトラウマを抱える庶務が自由奔放な彼女に恋をした…

これは生徒会庶務夜桜奏がが本物の天才と称された藤原千花の心を撃ち落とす物語である。

※ヒロインは藤原千花です。

初投稿で文才もないですが思いついたので書いてみました。

見ていただけたら幸いです。

私の文章能力では時系列がバラバラになると思ったので時系列バラバラのタグを追加しました。

設定はネタバレ多めなのでネタバレが嫌な人は見ない方がいいです。

目次

設定（多くのネタバレあり）―――――――――――――――1
第一章
生徒会は映画に行きたい―――――――――――――――3
絶体絶命の危機からのトラウマ　表―――――――――――8
絶体絶命の危機からのトラウマ　裏―――――――――――14
生徒会は映画に行きたい　続―――――――――――――25
めんどくさい二人～前夜～―――――――――――――――37

設定（多くのネタバレあり）

初投稿なので温かい目で見守ってください

夜桜奏（よざくらかなで）

性別：男

誕生日８／２０（物語開始時１６歳）

秀知院学園高等部２年Ｂ組で生徒会庶務を務めている。

見た目　：　薄い空色の髪色で目の色は黄色

とてもイケメンだが本人に自覚はない。

秀知院学園内にファンクラブが存在する。

好きなもの＆ａｍｐ；こと　音楽鑑賞　読書　藤原千花

嫌いなもの＆ａｍｐ；こと　四宮グループ（四宮かぐやは含まない）

特技　チェロ

家族構成

父　バイオリニスト　優柔不断な性格

母　ピアニスト　故人

姉　ピアニスト　秀知院学園高等部３年

妹　バイオリニスト　秀知院学園中等部２年

家族全員が天才音楽家である。

白銀御行が秀知院学園に入学してから初めて友達になった人物で藤原千花の幼なじみ。そのため白銀は入学当時ぼっちだった自分の友達になってくれた奏に感謝している。四宮かぐやとは中等部の時に仲が悪かったが、現在は良い友人関係を築いている。

藤原家とは家族ぐるみの付き合いであり、千花のことが小４の時から好きだが告白出来ないヘタレ。千花の姉の豊美に千花への恋心がバレており、よくからかわれている。

読書が好きで、なんでも読む濫読家である。一番読むジャンルは推

理小説だが、千花の影響（千花は自分で買って読めないため奏に買わせている）で最近は少女マンガを読むようになった。

性格は基本的に優しいが怒ったら予想だにしない行動を取るのでちょっと危険。自分より千花優先（時と場合による）。

学校の試験では学年５位以内には必ず入っているが、授業態度が悪いため成績はビミョーである。

授業中寝ている理由は寝不足である。３：３０に寝て４：３０に起きるという生活スタイルをしているためだが、白銀のように目の下に隈があるわけではない。

学校では授業を真面目に受けていないのに試験では点数を取れるため、白銀とは違う種類の天才だと思われているが、白銀と同じ努力中毒者で家で勉強しているため、学校では勉強したくないという理由で授業中に寝ているだけである。そのため授業中に指名されたらちゃんと問題に答える。

奏は四宮かぐやのような万能型の天才だが両親と自分を比べてしまい、劣等感を抱いている。また、事故により母が死んでしまったのは自分の責任であると思っており家族とは距離を置きたいと考え、一人暮らしをしている。

とりあえず設定を作りましたが途中で変わるかもです。

第一章
生徒会は映画に行きたい

設定で書き忘れましたが、念のために。（必要かどうかはわかりませんが）
夜桜君の一人称は基本的には僕ですが、マジギレしたときは俺になります。
追記
夜桜君が藤原書記を呼ぶときは
藤原さん→千花さんと変わりました

私立秀知院学園！
多くの天才たちが集まるこの学校。
その学校の生徒会が凡人たちの集まりであるはずがない！
事実、生徒会を率いる生徒会長たる白銀御行は混院であるにも関わらず、生徒会選挙を勝ち抜いた傑物である。
よってその男に選ばれた生徒会メンバーはさらに優秀な者たちであることに違いない。

秀知院学園生徒会庶務を務めている夜桜奏は午前の授業が終わり生徒会室に行こうしていた。授業が終わり時間がいくらか経っているためか教室に残っている人は片手で数えられる程しか居なかった。
その中には夜桜が恋心を抱いている生徒会書記藤原千花の姿があった。なので自然を装って藤原を誘ってみた。
「千花さん、一緒に生徒会室に行かない？」
「そうですねー。一緒に行きましょう」
ということで一緒に生徒会室に行くことになったのだが生徒会室に行くまで廊下が騒がしい。何事かと思っていると２人の女子が興奮しながら

「会長と副会長はいつ見てもお似合いですわ」
「ええ、やはりお付き合いされてるのかしら？」
と、言い合っていた。なるほど、会長と副会長が並んで生徒会室に行ったからかファンの人たちが騒いでいたのか。
「さすが会長とかぐやさんは人気ですねー」
「……そうだね」
夜桜は君も十分人気だよとは恥ずかしくて言えなかった。そんなことを話しているうちに生徒会室についた。
ガチャ
「こんにちは会長、副会長」
「こんにちは会長、かぐやさん」
「おや、藤原書記と夜桜庶務か。今日はやらなければならない作業が多いので助かるぞ」
「そうですね。人手が多いと作業も捗ります」
黙々と作業を進めていく。結構多かった書類がものの数分で片付いた。
「いやー、疲れましたね」
「いや、藤原書記は特にこれと言って仕事してなかったよな？」
「そんなことないですよー。あーそういえばですねー」
「露骨に話題を逸らしましたね。藤原さん……」
「もーかぐやさんまでー、それでですねー懸賞で映画のペアチケットが当たったんですよ」
「あれ、でも千花さんってそういうの見るの家で禁止されてなかった？」
「はい、ですから誰かにお譲りしようと思ったんですよ。会長とかぐやさんは興味ありますか？　映画の公開が今週末までで……」
ドケチな会長は手帳を出して週末の予定を確認した。
「ふむ、今週は珍しくオフだな。だったら四宮と夜桜庶務はどうだ？」
あれー、会長僕も誘うんですか。まあ副会長だけに聞いたらおかしいですけど……
って、すごい顔で副会長が見てるし。え、怖い怖い怖い怖い……

「いえ、僕は週末は用事がありますのでお二人で行ってきてくださ……」
「なんでもーこの映画を男女で観に行くと結ばれるジンクスがあるとか」
　ちょっと千花さん⁉？そんなこと初めて聞いたんだけど。これ絶対めんどくさいこと始まるよ。もうやだなぁ……両思いなんだからさっさと告ればいいのに、脈なしな僕とは違うんだからさ……
「ふむ、しかし折角のチケットを無駄にするのはな……」
「あら、会長。もしかして私と一緒に映画に観に行きたいのですか？
　男女で観に行くと結ばれる映画に会長と私の２人で行きたいとそう仰ったのですか？　それはまるで――」
　告白のようですね。そう言いたいんですよね。分かってますよ２人とも。千花さんは分かってないみたいだけど。そんな天然で抜けてるところも可愛いよね。
　ってそんなことは今どうでもよくて、
「ああ、今四宮を誘った」
　おや？　珍しく素直だな会長……そのまま告ってくれたらいいんだけどな……
「俺はそのような噂は気にせんが……四宮は違うようだな。どうする四宮、お前は俺とこの映画を観に行きたいか？」
　切り返し方がうまいなー、でもそういうところで頭良いこと発揮しなくていいんだよな……
　あ、僕も映画のペアチケット持ってるな、
　あーもう、どうにでもなれ！
「あ、話している途中で悪いのですが……」
「どうした夜桜庶務？」
「恋愛映画が嫌なのでしたら僕も違う映画のペアチケットを持っているのでどうかなと思いまして、確か僕の持ってるチケットも今週末までですので」
　!?
　あれ、会長と副会長が固まった？　なんで？

もしかして2人とも頭フルに使いすぎてショートしちゃいました？　じゃあ、糖分が必要ですが……饅頭だけかあ……千花さんが食べそうだなー

カーンコーンカーンコーン

「あ、午後の授業始まっちゃいます！」

パクッ

やっぱり千花さんが食べたなー、じゃあ僕も

「お先に失礼しますね」

僕は生徒会室を出て千花さんを追いかける。

「ねえ、千花さん」

「わっ、なんですか。急に後ろから話しかけられたらびっくりするじゃないですか」

「ごめんごめん、それでさ今週末って空いてない？」

「特にこれと言った用事はないですよ」

「じゃあ、もし良かったらなんだけど映画観に行かない？」

「行きたいですが、お父様からそういうの禁止されてるって奏君知ってますよね？」

「うん、でもさっき言った通りこのペアチケット今週末までで、処分に困ってるんだ。だから大地さんは僕が説得しとくから一緒に行かない？」

「そうですね、じゃあ行きましょう。そういった類のものは見たことないので楽しみです」

満面の笑みでそう言われた。

そういうのを自然にできるのはずるいと思う。

そんな君だからどうしようもなく好きになってしまうのだ。

今回の勝敗　白銀と四宮の負け＆ａｍｐ；夜桜の勝利

うまく文章がまとまらない…
ちょっと文章おかしいかもですが許して…

絶体絶命の危機からのトラウマ　表

皆は絶体絶命の危機に陥ったことはあるだろうか？
僕はある。今だ。
今僕は早坂さんにお願いされている
「もう逃げられないですよ。観念してください、夜桜君」
「これからはあなたにもかぐや様の恋愛頭脳戦の手伝いをしてもらいます」
「嫌だ、断る」
「あなたに拒否権はありません。もしそれでも断るというなら……」
「書記ちゃんにあなたの秘密をバラしますよ？」

ッ‼？

こんな状況になったのは何故だ？
初めは午後の授業後に教室に早坂さんが来たことからか。
あの時は確か生徒会室に行こうと準備していたときだ。
「庶務君居るー？」
「はい、居ますよ。何か御用ですか」
「さっき四宮さんが呼んでたよー？」
「副会長が……？　なんの用件でしょうか？」
「そこまでは知らないし！　でも、四宮さんが来てほしいってさー」
「じゃあ急ぎ生徒会室に行きますね」
「場所は生徒会室じゃないってさー、説明めんどいから案内するし！」
「（生徒会室じゃない……？）そうですか。では案内よろしくお願いします」
こんなこと言わなければ……！
のこのこついて行かなければ……！

あんな目に遭わずに済んだというのに‼？

２年Ｂ組の教室を出て……

「ところで場所はどこなのです？　生徒会室とは真逆の方向ですが……」

「なんかー？　図書室を右に曲がって？　そこを突き当たりまで行ったら左に曲がったところって言ってたよー？」

「ええ……分かりにくいですね……」

「そーだよねーだって君をおびき寄せるための嘘だから」

「え？」

気づいた時には遅かった。

そこは行き止まりでしかも学園の隅であるため人は僕たち以外居ない。

「この状態（モード）でお会いするのは初めてですね」

「え……？　は？」

「改めて自己紹介を。私は四宮家の使用人にしてかぐや様のお付きの近侍、早坂愛と申します」

……。

「なる、ほど……。あの四宮が学園内とはいえ娘を１人でいさせるはずないか」

「あまり驚かないのですね？」

「驚いてるさ。顔に出ないだけだよ。君と同じで僕も演技には多少心得があるからね」

「へぇ……演技、ですか……」

「違うとは言わせないよ？　それは仕事のときの姿でしょ？」

「そうですかそれがなにか？」

「さっきの学校のときとは全然違うしさ、それに癖なのかな動揺とかしたときに髪を手でいじくるでしょ？　無意識なのかは分からないけど、切り替えスイッチの役割なのかな？」

「……」

ダンマリは肯定してるのと同じなんだけど……

四宮だったらそれさえも計算している可能性があるし

「それで、用件は何？　こんなところまで来たんだからなんかあるんだろ？」
「……」
「なんか言ったらどう？」
「では単刀直入に申し上げます」
「会長がかぐや様に告るように手伝いをしてください」
「は……？」
「ですから会長がか……」
「聞き返しているわけじゃなくて、え？　どゆこと？」
「かぐや様と会長は両思いなのです。しかしプライドが高いので自ら告白することがありまけん。なので相手に告らせようと画策しているのです」
「バカなの？」
「はい、バカですよね。しかも2人とも相手は自分のことを好きに決まっている。でも自分は相手のことなんて好きじゃないって言い張るんですよ。本当に馬鹿馬鹿しいですよね」
自分の主人のことここまで言うかね。
まあ、溜まってるものはあるんだろうけど。
しかし話聞いてるだけでもちょっとイラッとするな……
両思いなのに告らせたい？　まあ、2人が両思いなことぐらい見てれば分かるけど！
こっちは脈なしで小4の時からずっと悩んでいるのに？
ふん、羨ましい限りだな！
だから……
「悪いけどそれは断らせてもらう」
「へぇ、理由を聞いても？」
「そんなことに付き合ってられるか」
「なるほど、しかしあなたに拒否権はありません。否が応でも付き合ってもらいます」
「嫌だ。断る」
「私がなんでこんなところまであなたを連れてきたか分かりますか

？」

……？

急になんだ…？

「あっ！　しまった……」

ここは行き止まりで、話をしている間にいつの間にか僕が壁の方に追い詰められている……！

クソ、話に夢中で全然気づかなかった……

さすが四宮といったところか、最悪だ……、

「もう逃げられないですよ。観念してください、夜桜君」

「これからはあなたにもかぐや様の恋愛頭脳戦の手伝いをしてもらいます」

「嫌だ、断る」

……。

こうして場面は最初に戻るのだが……

四宮家が僕の秘密を握っている？　しかもそれを千花さんに？

僕が千花さんのことが好きなことは誰も知らないはず……

いや、四宮ならそれぐらいすぐ調べれば分かるのか……？

どちらにしろそれはマズイ！

「あの四宮が僕の秘密を握っているなんて末恐ろしいね。一体全体どんな秘密を握ってるんだ？」

「それは……」

えっ、教えてくれるのか……？

「あなたが母親を見殺しにしたことですよ。」

ッ‼？

それはッ！

それは僕のせいじゃない、僕のせいなんかじゃ……

「あなたのせいでしょう。声に出ていますよ」

違う！　違う……！　あれは事故で……

「でも、あなたがあの場に居なければ」

あなたのお母さんは死ななくて済んだのに

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ」

僕は早坂さんにそう言われパニックになってしまった。

「落ち着いてください。私たちに協力していただければ秘密は守ります」

「……っ、ほんとうに？」

「ええ……もちろんです。私たちに協力する気になりましたか？」

「ああ……だからっ、だから千花さんに……」

「分かりました。では、これからよろしくお願いしますね」

早坂さんは笑みを浮かべて言う。

ああ……だから……これだからッ

四宮グループは大嫌いだ

急な展開ですが許してください、
こうするしか早坂さんと関わりが作れなかったんです…
期末が来週にあるのに…
勉強が手につかないっ！
誰か助けて！

絶体絶命の危機からのトラウマ　裏

今回はハーサカさん視点です

早坂愛視点

今日もかぐや様は昼休みに会長さんと恋愛頭脳戦（笑）を行ったらしい。まったくかぐや様は付き合わされる私のことも少しは考えてほしいものです。

午後の授業中

かぐや様からメールが来た。授業中になんだろう。でも、重要案件であることに間違いはない。急ぎ確認しないと……

「夜桜庶務を会長の陣営に入る前にこちらに引き入れなさい。方法は問わないわ。今日の放課後には実行するように。」

はあ……またかぐや様の無茶振りかー

人手が増えるのは負担が減るからありがたいんだけど

しかし庶務君か……確か庶務君のことは中等部のときに調べてるよね……えーと

早坂の頭の中には何百人もの膨大な情報が頭の中に入っている。無論その中には夜桜や藤原の情報もある

《夜桜奏の情報》

・生徒会庶務

・ファンクラブが存在する

・書記ちゃんのことが好き

・小等部のときにいじめられていた

・故人である母親とは仲が良かった

・四宮家が大嫌い

・母親の死は自分のせいだと思っている
……これは彼の最大の秘密だと思われる
……⁉？
これは……
彼は全く悪くないですが優しいが故にこの件に関して責任を感じているといったところでしょうか……
あまり使いたくない手ですが、協力してもらえないなら使わざるおえないですよね……
かぐや様からの命令には逆らえないので恨まないでくださいね庶務君

放課後
はあ、なるべく穏便に済ませたいんだけど……そう上手くいくとは思えないんだよな……
彼四宮家のこと大嫌いだし……
でも、私が四宮家の使用人だってことは知らないから警戒とかは特段されないと思うんだけど
２年Ｂ組の教室の前
あー庶務君居るかな？
「庶務君居るー？」
「はい、居ますよ。何か御用ですか？」
あ、居た。良かった良かった
この学校広いですから探すのは結構疲れるんですよねー、慣れてるのでなんてことないですが
はあ、しっかし庶務君は相変わらずイケメンだなあ……私もこんな彼氏ほし……
って今私は何を考えて……？　今は仕事に集中しないと
「さっき四宮さんが呼んでたよー？」
「副会長が……？　なんの用件でしょうか？」
やっぱり四宮って言うと警戒しちゃうよなー
でも、一番呼び出すには最適な理由なんだよな……

テンション高くして流しちゃおう！
「そこまでは知らないし！　でも、四宮さんが来てほしいってさー」
「じゃあ急ぎ生徒会室にいきますね」
あー、そーなるよね、
かぐや様からなら生徒会関係の話だと思うよね……
クラス違うしあんまり関わり合いないからなあ……
あれ？　なんだろこの気持ち……
「場所は生徒会室じゃないってさー、説明めんどいから案内するし！」
「そうですか。では案内よろしくお願いします」
ふう。連れ出すことに成功しましたね。
やっぱり書記ちゃんよりは簡単ですね。まあ、この私でも制御できないあの子が異常なのですが…
「ところで場所はどこなのです？　生徒会室とは真逆の方向ですが……」
「なんかー？　図書室を右に曲がって？　そこを突き当たりまで行ったら左に曲がったところって言ってたよー？」
「ええ……分かりにくいですね……」
だよねー、自分でも思うもん
でも、君を連れ出すことが目的だからそれでもいいんだよ？
「そーだよねーだって君をおびき寄せるための嘘だから」
「え？」
驚いた顔も可愛いなあ……
ってそうじゃなくて！
あーもうっ調子狂うなぁ……
なんでだろ……？
でも、正体を明かしたら警戒されるんだろうなあ……
それはなんか……
でも、仕事だから……
「この状態（モード）でお会いするのは初めてですね」
「え……？　は？」

「改めて自己紹介を。私は四宮家の使用人にしてかぐや様お付きの近侍、早坂愛と申します」
ッ！
急に敵意がすごいですね……
やっぱり四宮家を恨んでいるという情報は本当でしたか……
「なる、ほど……。あの四宮が学園内とはいえ娘を1人でいさせるはずないか」
わざわざあの四宮って言うところにやはりトゲがありますね
まあ、なんで四宮を恨んでいるかはかぐや様に調べるなと言われてるので知らないですが……
四宮を恨む気持ちはかぐや様と一緒に行動することが多いので分かるつもりです
ですがここまでとは……
しかも、私が四宮の人間って分かった時から言葉遣いちょっと乱暴な気がするんですけど……
しかし
「あまり驚かないのですね？」
「驚いてるさ。あまり顔に出ないだけだよ。君と同じでぼくにも多少演技には心得があるからね」

ッ！

「へぇ……演技、ですか……」
「違うとは言わせないよ？　それは仕事のときの姿でしょ？」
そうだけどあまり話さないのによく分かるなあ……
まあ、生徒会に入ってるのは優秀な人たちばかりだから、協力してもらうときにはどうせバレるんだろうからいいけど
「そうですがそれがなにか？」
「さっきの学校のときとは全然違うしさ、それに癖なのかな動揺とかしたときに髪をいじるでしょ？　無意識なのかは分からないけど、切り替えスイッチとかそういう役割なのかな？」

「……」
本当によく人を見ているな……
図星だけどさ、このダンマリを肯定と受け取ってくれると操りやすいんだけど……
でも、こんな簡単に演技だってバレるのはちょっとな…もう少し訓練しとこ
「それで用件は何？　こんなところまで来たんだからなんかあるんだろ？」
うん、若干焦りが見える
これは楽勝かな？　じゃあもう少し焦らそう
「なんか言ったらどう？」
「では単刀直入に申し上げます」

「会長がかぐや様に告るように手伝いをしてください」
「は……？」
ですよね、気持ちは分かりますがこれからはあなたにもそれを手伝ってもらうのですよ
「ですから会長がか……」
「聞き返しているわけじゃなくて、え？　どゆこと？」
「かぐや様と会長は両思いなのです。しかしプライドが高いので自ら告白することはありません。なので相手に告らせようと画策しているのです」
「バカなの？」
「はい、バカですよね。しかも2人とも相手は自分のこと好きに決まってる。でも自分は相手のことなんて好きじゃないって言い張るんですよ。本当に馬鹿馬鹿しいですよね」
はー、溜まってるもの全部吐き出しちゃった……
あれ？　なんか考えてますね、前向きな返答をいただきたいところですが……

「悪いけどそれは断らせてもらう」

「へぇ、理由を聞いても？」
「そんなことに付き合ってられるか」
ほう……仮にも四宮家によくそんなこと言えますね、ちょっと感心しますよ
私にはそんなこと出来ないですから…
「なるほど、しかしあなたに拒否権はありません。否が応でも付き合ってもらいます」
「嫌だ、断る」
強情ですねー自分の状況を分かってないんですかね……
もうあなたは追い詰められているというのに
「私がなんでこんなところまであなたを連れてきたか分かりますか？」
どうやらまだ気づいてないようですね……
まあ、そういうふうに仕掛けたのは私なんですけど
「あっ！　しまった……」
やっと気づいたようです
ふふっ「最悪だ……」って声に出てますよ
何はともあれ
「もう逃げられないですよ。観念してください、夜桜君」
「これからはあなたにもかぐや様の恋愛頭脳戦の手伝いをしてもらいます」
「嫌だ、断る」
「あなたに拒否権はありません。もしそれでも断るというのなら……」
「書記ちゃんにあなたの秘密をバラしますよ？」
……。
庶務君、分かりやすく動揺していますね
四宮の人間である私に追い詰められていること、
また私に秘密を握られていること、

そしてその秘密を書記ちゃんにバラすと言われた、
この3点からの動揺ですかね
さあ、どういう反応が返ってくるのでしょうか？
しかし、すごく考え込んでますね……
まあ、そりゃあそうですよね
嫌っている四宮の人間から脅されてるんだから……

「あの四宮が僕の秘密を握っているなんて末恐ろしいね。一体全体どんな秘密を握ってるんだ？」
「それは……」

どうしよう……？　なんて言ってお願いしようか迷うなあ……
庶務君の警戒心が高すぎて全然協力してくれそうにないんだけど……
あんまりあの秘密を使ってお願いしたくないんだよなー情報だと彼が悪いわけじゃないから…
でも、仕事は絶対に完遂しなきゃだし……
悪いけど庶務君、これは仕事だから私情を加えることは出来ないんだ。だから私を恨まないでね

「それは……」

「あなたが母親を見殺しにしたことですよ」

っ！
やっぱりこの秘密じゃない方が良かったかもしれない
庶務君がさっきよりも動揺を隠し切れてない…

「それはッ！」

「それは僕のせいじゃない。それは僕のせいなんかじゃ……」

「あなたのせいでしょう。声に出てますよ」

ごめんね、追い討ちをかけるようなことして
だから、許してなんて虫が良すぎる話だよね……
でも、大丈夫。嫌われるのは慣れてるから……

「違う！　違う……！　あれは事故で……」

分かってるよ、君は悪くない。でもごめんね……

「でも、君があの場に居なければ」

君を苦しめるようなことして……

あなたのお母さんは死ななくて済んだのに

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ」

ッ‼？

さすがにやりすぎました……落ち着かせないと！

「落ち着いてください。私たちに協力していただければ秘密は守ります」

大丈夫かな……？　これで安心してもらえるといいけど……

「……っ、ほんとうに？　」

っ！　良かった……
でも、悪いけどここで畳み込ませてもらうよ

「ええ……もちろんです。私たちに協力する気になりましたか？」
「ああ……だからっ、だから千花さんに……」
「分かりました。では、これからよろしくお願いしますね」

こう言って……ちょっと笑ってるようにして……

こうすればかぐや様じゃなくて私が嫌われるようになるでしょう

……すごい睨みつけてきますね
まあ、別にいいのですが……

これで任務終了です
ちゃんと言質も取ったので連絡先を交換して完了ですね

「協力してもらいたいときは私から連絡しますのでよろしくお願いします」

そう言って私はその場から去った

はあ、疲れた……
しかし、書記ちゃんに秘密をバラされるのがそんなに嫌なのかな……
それぐらい書記ちゃんのことが好きなんだね……

でもなんか、羨ましい……
そんな恋が出来るなんて……
自由に縛られることなく生きられるなんて……

そんなことを思いながら主人の帰りを待つ

早坂はその時胸に感じたチクリとした痛みを無視をした
この感情は仕事の邪魔になるからと
一時の気の迷いだと
気づかないフリをした

そして早坂はいつも通りの自分を演じる

「お帰りなさいませ。かぐや様」

本日の勝敗　夜桜の負け＆ａｍｐ；早坂の勝利？

どうでしょうか？
早坂さん自覚あり？なし？な恋の始まりです
気づかないフリをするのが吉と出るか凶と出るか……
仕事を理由に誤魔化すなんてハーサカさんらしいですね
そういうところ大好きです！

でも、私が1番好きなキャラは藤原書記なんですよ……

ごめんねハーサカ……

生徒会は映画に行きたい　続

夜桜君が藤原書記を呼ぶときは
藤原さん→千花さん
に変えます。藤原さんだとかぐや様と呼び方が被るので分かりにくいなと……
その点ご了承下さい
そして投稿が遅れて大変申し訳ない！

あの日の夜……
早坂さんから早速連絡が入っていた
内容は週末の映画に副会長が会長と（偶然）会って一緒に観るというのを手伝ってくれというものだった
しかし僕も千花さんと映画を観に行く予定がある
だが、２人は朝一番の時間帯に観に行くらしい
なら被らないようにすればいいだけか
でも、千花さんも僕もあの２人に映画のペアチケット渡してなくないか……？
まあ、僕は渡してないしこういう連絡が来たはということは千花さんが２人に渡したのだろう
はあ、まだ木曜日か…なんか凄く疲れたな…
まだ学校もあるし映画の件もあるし…
あ、大地さんに映画のこと許可貰ってない！
……。
もう後でいいか……
ふわぁ……
眠くなってきた……
ってもうこんな時間かよ！
もう寝ないと……
すう……すう……

ピピピピ、ピピピピ……

バシッ

ふあぁ……

眠い、とても眠い……

遅くまで勉強してたわけじゃないのに……

早く支度して出ないと遅刻するな

急がないと

とは言っても歩きだから大丈夫だろうけど……

ガチャッ

キーンコーンカーンコーン

ふう、ギリギリ間に合った…

ドアと近いところに席があって良かったー

「おい、夜桜ー！ギリギリだぞ、今度からはもう少し早く来るように」

「はい、善処します」

「善処ってお前なあ…ったく」

担任は呆れ気味だ

それもそうだろう、僕が遅刻ギリギリの時間に登校してくるのはいつものことだしこの会話も何回目か分からないほどしている

今日も特にこれといった連絡は無いですね

あってもめんどくさいだけですが

……。

「以上でＨＲを終わる。礼！」

「ありがとうございました」

ワイワイガヤガヤ

朝のＨＲが終わると教室は騒がしい

１時限目は…数２かー

あの先生は寝てたら起こしにくるからな…

まあ、寝るんだけどさ

予習はしてあるから当てられても答えられるし寝ててもいいじゃんって思うのですが…

試験でも赤点取ったことないですし

ってもう授業始まりますね

ガラガラガラ

「起立！礼！」

「お願いします（おやすみなさい）」

というわけでさよなら～

すう…すう…すう…

「おい、夜桜っ！」

うん？なんですかね、人がせっかく気持ちよく寝ていたというのに

「お前は毎回毎回授業中に寝て、誇りある秀知院生徒会庶務であるという自覚はあるのか!?」

またそれですか、懲りないですね何回も言っているというのに

「ありますよ。毎回言っていますがあなたの授業が聞くに足るような内容でないのが問題です。」

「なんだとっ！」
「事実でしょう？」
「……授業を続ける。不真面目なやつに構ってられるか」
へぇ珍しい。あの先生があっさり引くなんて…
明日は槍でも降るんですかね？
まあ、ここは有難く寝させていただきますかね
すう…すう…すう…

「起立！」
おや、授業が終わりましたか
ガタッ
「礼！」
「ありがとうございました」

次の授業は……っと現国ですかー
もう結構寝たし次は起きてますかね…

「夜桜庶務」
ん？なんだ？さすがに毎日寝てたら怒られますかね？
「なんですか、会長」
「今日も溜まっている仕事が多い。今日は四宮が来れないから昼休みまた生徒会室に来てくれ」
「分かりました。でも千花さんは？」
「今日は藤原書記が居たら終わらん。まあ、放課後もあるから大丈夫だとは思うが一応な」
「なるほど…了解です」
「ああ、頼んだぞ」
どうやら仕事を頼みに来ただけのようですね
しかし今日は副会長は来れない…？副会長確か今日は休みでしたかね？
そこら辺は覚えてないですが、早坂さんとの1件があってちょっと

気まずいんですよね…
多分僕の方が一方的に感じているだけでしょうが…
なので居ない方が僕的には有難いのでいいのですが、なんか会長隠してる感じがしたのは気のせいですかね
会長からも恋愛頭脳戦（早坂さんが言ってた）の手伝いを頼まれるとか嫌なのですが…
とーっても嫌なのですがっ！
もうこれ以上僕の心労を増やさないで欲しいです…
まあ、会長は人気はありますが四宮グループのような強力な後ろ盾があるわけじゃないので普通に断れるのでいいですが

あ、もうすぐ授業が始まりますね

そして午前の授業が終わり昼休みに

ふわぁ…1時限目以外は珍しく起きてたのでちょっと眠いですが…
生徒会室に行く前に昼食としますか…って弁当忘れた!?やばい、この時間じゃもう購買残ってないですよ…
仕方ないのでそのまま生徒会室行きますか

そして生徒会室へ…

ガチャ

「失礼します、ってえええええ!?」

何あれ？書類多くないか？え？なんでこうなった？
あんなに仕事溜めてたっけ？
いや、そんなはずはない！じゃあなんで？どうして？

軽くパニックなんですけど？
なにあの書類の山の数々は？ええ？もうよく分からないんですが…
「会長？書類多くないですか…？」
「そうなんだよ、昨日放課後夜桜庶務は来なかったから知らないと思うが校長がな…」
あー…昨日は早坂さんに追われてその後はちょっとパニックになってしまったのでそのまま帰ってしまったんでしたね…
校長がなんか無理難題をふっかけたんですか…
「大変ですね…帰ってもいいですか…？」
「言いわけないだろう?!まじで大変なんだって、頼むから！」
「う、分かったよ。だから叫ばないでくれ…」
「ああ、分かった。まずはこっちの書類を頼む」
「了解」

黙々と書類を片付けて行く
喋ってたら終わらないほどの量だからな…
そうして２０分程で作業は終わった
「終わった…」
「疲れたな…」
「さすがにあの量はな…もう勘弁願いたいところだ」
「全くですよ…」
「ところで夜桜庶務。いや、奏」
「わざわざ言い直したりしてどうした？」
「いつまで敬語なんだ？」
「ん？それは御行に対してってことか？」
「それもそうだが、藤原書記だったりクラスメイトにも敬語だろう」
「…ちょっと中等部の時に色々あってな」
「……そうか（それは触れちゃいけない系の話なのか？分からん…）」
「いや、別に大したことはしてないんだがな…その事件からはずっと

敬語だったから特に気にしてなかったな…」
「へぇ、そうなのか…（事件?!事件って何したんだ?）」
「まあ、色々あったんだよ」
「……でも、素はその砕けた感じなんだろ?」
「ああ、そうだけど?」
「じゃあ別に敬語にしなくてもいいんじゃないか?」
「うーん、でも今更変えるのもなあ…それに庶務という役職上、御行や副会長ほどではないとはいえ表舞台には出る方だから敬語の方が良いしそれに…」
「それに?」
「その方が教師からの評判が良くなる」
「そこを気にするなら授業中寝るなよ…」
「あー…だってさーつまんないんだもん」
「つまんないってお前なあ…それで点数取れるんだから羨ましいよ…」
「家で勉強してるからな」
「そういう問題か?」
「そういう問題だ」
「…そうか。それで話を戻すが教師の評判が欲しいのか?」
「違う。いや、違わないんだけど」
「どっちだよ」
「だってその方が現生徒会の評判が良くなるだろ?僕の授業態度は他のクラス、学年の人達は分からないからな」
「でも、授業中に寝てるせいで一部の先生から嫌われてるけどそれはいいのか?」
「僕が嫌われる分には構わない。逆にその方が良い」
「ん?それはどうしてだ?」
「石上会計のことは校長が知ってるから生徒会で先生に嫌われてるのは僕だけだ。御行や副会長はそんな僕を制御していると見えるからな、評価は自ずと上がるはずだ」
「そんなことのために寝てるのか?」

「いや、普通に寝不足」
「おい、ちゃんと寝ろ」
「ええ…やだ」
「会長命令だ。ちゃんと休息を取れ。このままじゃ仕事に支障が出るし、何より健康に良くないからな」
「お前が言うか」
「別に俺は不健康じゃない、目付きが悪いだけだ…」
「語尾が弱々しいな」
「うるっさいな、目付きが悪いのは気にしてるんだから突っ込むなよ！とにかくちゃんと寝ろよ」
「……善処するよ」
「善処かよ…ってもうこんな時間か、そろそろ昼休みが終わるな」
「そうですね、じゃあ教室に戻りますか、会長」
「ああ、って自然に敬語に戻ってるし…」

いや、敬語の方が慣れてるんだって
中等部の時から使ってるから

次の授業はなんだったっけかな？
ちょっと眠いから寝よう…

そうして午後の授業が終わり放課後に…

今日みたいに仕事が溜まることはないとは思うけどな…
生徒会室に行きますかね

ガチャ

「こんにちは、会長…あれ？千花さんは？」

「藤原書記はペスの散歩当番だそうだ」
「あー…そうなんですか…」
「そう分かりやすく落ち込むなよ、藤原書記のことが好きだからって」
「えっ!?なんで知って…」
「えっ、カマかけただけだったんだが…図星だったのか…」
「なっ!そういう御行だって副会長のことが好きなんだろう?」
「えっ?いや、別に俺は四宮のことなんて好きじゃないぞ!?!?!」
「慌てすぎ、そんなこと言って本当は副会長のことが好きなんだろ?」
「違う。四宮は俺のことが好きみたいだが俺は四宮のことなんて好きじゃない。」
「ああ、そう…じゃあそういうことにしとくよ」
「断じて俺は四宮が好きなわけじゃないからな。そうだ、奏に手伝ってほしいことがあるんだけ…」
「断る」
「食い気味すぎないか?ちゃんと人の話を聞けよ」
「断る」
「なんで?まだ要件言ってないぞ?」
「四宮が俺に告るように仕向けてくれって言いたいんだろう?」
「ああ、そうだ。分かってるなら話は早いな、それを手伝ってくれないか」
「断る」
「なあ、奏。忘れてないか?俺はお前が藤原書記のことが好きだということを知ってるんだぞ」
「……分かった、手伝えばいいんだろう。それよりそんなに分かりやすかったか、僕…」
「いや、生徒会で仕事してる時よく目で追ってたからな…でも、教室とかではそういうのはなかったな…」
「そうか…じゃあ石上会計にもバレてんのかな…」
「石上はそういうの鋭いから気づいてるんじゃないか?」
「まじか…」

そんなに分かりやすかったのか…
それなのに肝心の千花さんにはバレてないという…
はあ、早く僕も告らないとな…

千花さんは人気だ、よく告られているところを目撃することがある
その度に僕は自分が嫌になる
今の関係が壊れるのは怖いからと、まだ告らなくても大丈夫だと、色々な理由を並べて逃げ回る自分のことが
だから、今年は、今年こそは千花さんに告白する
逃げ回ってばかりじゃ進展しない
振られるかもしれないと思うと怖いけど
このまま終わるよりはずっとましだと思うから

でもそうは言っても怖いものは怖い

だから僕は千花さんを落としたい

ガツガツいけば引かれるだろうか…
でもそうでもしなきゃ僕のことなんて恋愛対象として見てくれないだろう
夏休みまでには告りたいところだけど…
とりあえず今は週末の映画のことを考えよう

その日の夜……
もう覚悟は決めた。僕は千花さんを落としたい
だからガツガツいってやる

プルルルプルルル……
ガチャ

「あ、もしもし奏です。大地さんですか？」
「ああ、私だよ。珍しいね、君の方から連絡をくれるなんて。それで何か用かい？」
「はい、週末僕に千花さんを貸してくれませんか？」
「ほう、理由を聞いてもいいかな？」
「一緒に映画観に行きたいんですよ」
「……私が家でそういうものを観るのを禁止しているのを知ってるよね？」
「はい」
「ダメだ」
「大地さん、そこをなんとか……」
「ダメなものはダメなんだよ、奏君。でももし君があの提案を呑んでくれるならいいよ」
「……」
「返答は？」
「あの提案は呑めません」
「どうしてかな？　君は千花のことが好きなんだろう？　だから千花との許婚契約をもう一度と提案しているだけなんだが、どうして何年も断り続けてるんだい？」
「確かに僕は千花さんのことが好きです」
「だったら……」
「でも、その提案の中に千花さんの意向は入ってませんよね。それに僕は自分の力で千花さんを振り向かせたいんです。だから、だからこそ、その提案は呑めません」
「……。はあ、千花もかわいそうに……」
「えっ？　何かおっしゃられましたか？」
「いや、なんでもないよ。でもそれなら先ほどのことには許可を出すことは出来ないな」
「大地さん」
「何かな？」
「千花さんのとっておきの写真があるのですが……」

「許可しよう」
「ありがとうございます。後ほど送らせていただきます」
よっしゃ、これで2人で映画を観に行ける！
大地さんが親バカで良かったな…
そういえばさっきのはなんて言っていたんだろうか
声が小さくて聞こえなかったんだよな…
まあ、いいか
週末、楽しみだなぁ

大地さんが親バカなのかは分からないですがそうだったら面白いかなと思ったのでそうしました

期末が終わったのでちょっとは投稿頻度が上がるかもです
明日全教科テスト返ってくるので赤点だったら下がるかもですが分からないです

後、設定のところにどんどん夜桜君の秘密を書いてくので良かったらもう一度見てってください
今日は書き換えませんが（笑）

めんどくさい二人～前夜～

〈ｓｉｄｅ夜桜奏〉

　大地さんとの通話が終わり僕は千花さんに連絡した
「もしもし、千花さん？」
「……はい、私ですよ？」
「なんで疑問形なのさ？」
「特に意味はないです。それで何か御用ですか？」
「うん、大地さんから映画の許可がとれたからその連絡をと思って」
「本当ですか!?　明日が楽しみですね～」
「そうだね、時間帯はいつがいいかな？　僕は午前中は用事があるから午後からの方がありがたいんだけど……」
「じゃあ午後２時くらいに駅前に集合でいいですか？」
「うん、大丈夫だよ」
「遅刻せずに来てくださいね」
「もちろんだよ」
「じゃあまた明日～」
「あ、そうだ」
「どうしました？」
「今夜は冷え込むらしいから風邪を引かないように暖かくして寝てくださいね」
「……」
「千花さん？」
「っ！　なんでもないです。心配してくれてありがとうございます。じゃあおやすみなさいっ！」
　ガチャ
　え、
　なんかガチャ切りされた……
　変なこと言ったかな……

嫌われてなきゃいいけどなあ……
でもさっきの間はなんだったんだろうか
思ったこと言っただけなんだけど……
これはやってしまったやつなのか？
うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
明日会うのが気まずくなってきた……
急に恥ずかしくなってきたし……
はあ～うじうじしてても仕方がない
明日はおしゃれしてかないと……
あ、あの二人のこと忘れてた
変な事起きないといいけど……
絶対起きる気がするよ……
トラブルに巻き込まれたくないよ……
まあ、仕方ない
切り替えていこう！
明日は早いしもう寝よう……

〈ｓｉｄｅ藤原千花〉

一方その頃、藤原千花は……

あれ？　奏くんから電話がきてる……

「もしもし、千花さん？」

はあ～本当にいい声してますね奏くんって
この声なんか落ち着くんですよね……
って返事しなきゃ！

「……はい、私ですよ？」
「なんで疑問形なのさ？」

それは私にも分からないです
なんか焦ってこうなってしまったので
強いて理由を挙げるとするなら奏くんの声が良すぎて聴き入っていたから、でしょうか

「特に意味はないです。それで何か御用ですか？」

って本人にそんなこと言えないよ……
さすがに恥ずかしいですし……

「うん、大地さんから映画の許可がとれたからその連絡をと思って」
「本当ですか!? 明日が楽しみですね～」

お父様から許可をとれるなんて……
言い方悪いですけどとれると思ってなかったので……
その場は誘われて許可とってくれるって言ってくれて嬉しくてはしゃいじゃいましたけどお父様はそういうところ厳しいから半分くらい諦めてたんですよね
だから明日が楽しみです！

「そうだね、時間帯はいつがいいかな？ 僕は午前中は予定があるから午後からの方がありがたいんだけど……」
「じゃあ午後2時くらいに駅前に集合でいいですか？」
「うん、大丈夫だよ」
「遅刻せずに来てくださいね」
「もちろんだよ」
「じゃあまた明日～」
「あ、そうだ」

へ？　なんでしょうか？

「どうしました？」

「今夜は冷え込むらしいから風邪を引かないように暖かくして寝てくださいね」

……。

なんでそういうこと無自覚に言えるのかなあ……？

奏くんのそういうところが私は……

でも奏くんは私のことなんて……

あの許嫁契約もご両親に言われてしたものですし……

私は嬉しかったんだけどな……

『僕は一生かけて千花ちゃんを幸せにする！』

またあの言葉が聞きたいな……

あれいつ言ってくれたんだろう……

幼稚部の時かな……

初等部４年の時に解消した契約だから

なんか涙出てきちゃった……

なんでだろ……

やだなあ……もう奏くんは私のこと好きな訳ないのに……

「千花さん？」

「っ！　なんでもないです。心配してくれてありがとうございます。じゃあおやすみなさいっ！」

ガチャ

はあ～びっくりしました

あ、電話切っちゃいました……
……泣いてたことバレてないですかね？
明日が楽しみなんですけどなんか気まずいです……
まあ、切り替えていきましょう！
せっかく奏くんがお父様から許可とってくれたんですから……
……はあ、涙止まんないなあ

コンコン

「千花、入るよ」

っ！

「ちょっと待ってください、お父様！」

ガチャ

「千……花……？　どうして泣いてるんだい？」
「なんでもないです。早く出ていってください！」
「でも何かあったんだろう？　どうしたんだ？」
「いいから早く出ていってください!!」
「分かった、分かったからクッションを投げないでくれ！」
ちょっと待って欲しいって言ったのに入ってきたお父様が悪いんですよ
「悩んでることがあったら誰かに相談するんだよ、千花」
「……じゃあお父様じゃなくてお母様に相談します」
「ああ、誰かに頼ることも大切だからね」
「……分かってますよ」
「うん、じゃあおやすみ千花」
「おやすみなさい、お父様」
バタン

誰かに頼ることも大事……
そんな当たり前のこと分かってたはずなのになんでしなかったんだろう
誰かにこのことがバレてしまうことが怖かったのかな……？
こんなに臆病な人間を好きになってくれる人なんているんだろうか？
……ネガティブな考えは止めよう
今度、お母様にこのことを相談する
そして少しでもいいからこの思いを知って欲しい
共感してくれなくてもいいから
慰めてくれなくてもいいから
この思いを

何かしら頼る人が欲しいな……

今はそれより明日のことを考えないと
どんな服で行こうかな？
すごく楽しみで、それでいて少し恥ずかしい
奏くんはどんな服を着てくるのかな？
もうすぐ日にち変わっちゃう……
寝ないと……

〈ｓｉｄｅ夜桜奏〉

朝６：３０
ピピピピピピピピ、バシッ
ふあぁ～
よく寝たな……
今日は忙しい

千花さんとの事も楽しみだがあの二人のことも忘れちゃいけない
……忘れたいけども
ともかく、集合時間までは時間があるからちゃんと準備しよう
しかし四宮はどれだけの人員を秀知院に送っているんだろうか
さすがに早坂さん1人ではないだろう
もしそうなら早坂さんの仕事量えげつないからな
……四宮ならやりかねないところが恐ろしい
そんなことよりあの二人のことだ
絶対に上手くいかない
断言してもいいくらいだ
それを何とかしなきゃいけないんだよな
何もしてないのにもう疲れたのはなんでだ？
はぁ……

上手くいってくれたらいいんだろうが、心の底からそれを願えない
僕は……

今回の勝敗……次回に続く

更新が遅れて大変申し訳ない
期末の結果が悪くスマホが没収されていまして…
今週はまた土曜ぐらいに更新しますので気長にお待ちください
次回はｓｉｄｅ早坂愛となります
奏と千花の絡みは次々回となりますのでよろしくお願いします